

機関車を見ながら

芥川龍之介

青空文庫

……わたしの子供たちは、機関車の真似をしてゐる。尤も動かもつとずにある機関車ではない。手をふつたり、「しゅつしゅつ」といつたり、進行中の機関車の真似をしてゐる。これはわたしの子供たちに限つたことではないであらう。ではなぜ機関車の真似をするか？ それはもちろん機関車に何か威力を感じるからである。或は彼等自身も機関車のやうに激しい生命を持ちたいからである。かういふ要求を持つてゐるのは子供たちばかりに限つてゐない。おとな大人たちもやはり同じことである。

ただ大人たちの機関車は言葉通りの機関車ではない。しかしそれぞれ突進し、しかも軌道きだうの上を走ることもやはり機関車と同じ

ことである。この軌道は或は金銭であり、或は又名誉であり、最後に或は女人によにんであらう。我々は子供と大人とを問はず、我々の自由に突進したい欲望を持ち、その欲望を持つ所におのづから自由を失つてゐる。それは少しも逆説ではない。逆説的な人生の事実である。が、我々自身の中にある無数の我々の祖先たちや一時代の一国の社会的約束は多少かういふ要求に齒どめをかけないことはない。しかしかういふ要求は太古たいこ以来我々の中うちに潜んでゐる。

……

わたしは高い土手どての上に立ち、子供たちと機関車の走るのを見ながら、こんなことを思はずにはゐられなかつた。土手の向うには土手が又一つあり、そこにはななかば枯れかかつた椎しひの木が一本

斜ななめになつてゐた。あの機関車——3271号はムツソリニである。ムツソリニの走る軌道は或は光に満ちてゐるであらう。しかしどの軌道もその最後に一度も機関車の通らない、さびた二三尺のあつたことを思へば、ムツソリニの一生も恐らくは我々の一生のやうに老いてはどうすることも出来ないかも知れない。のみならず——

のみならず我々はどこまでも突進したい欲望を持ち、同時に又軌道を走つてゐる。この矛盾むじゆんは善いい加減に見のがすことは出来ない。我々の悲劇と呼ぶものは正まぎにそこに発生してゐる。マクベスはもちろん小春治兵衛こはるぢへゑもやはり畢つひに機関車である。小春治兵衛は、マクベスのやうに強い性格を持つてゐないかも知れない。し

かし彼等の恋愛のためにやはりがむしやらに突進してゐる。(紅^こ

毛^う人^{まうじん}たちの悲劇論はここでは不幸にも通用しない。悲劇を作る

ものは人生である。美学者の作るわけではない。)この悲劇を第

三者の目に移せば、あらゆる動機のはつきりしないために(あら

ゆる動機のはつきりすることは悲劇中の人物にも望めないかも知

れない。)ただいたづらに突進し、いたづらに停止、——或は顛^て

覆^{んぶく}するのを見るだけである。従つて喜劇になつてしまふ。即ち

喜劇は第三者の同情を通過しない悲劇である。畢^{ひつきやう}竟我々は

小を問はず、いづれも機関車に变りはない。わたしはその古風な

機関車——煙突の高い3236号にわたし自身を感じてゐる。ト

ランス・テエブルの上に乗つて徐^{おもむろ}に位置を換へてゐる3236号

に。

しかし一時代の一国の社会や我々の祖先はそれ等の機関車にどの位歯どめをかけるであらう？ わたしはそこに歯どめを感じると共にエンジンを、——石炭を、——燃え上る火を感じないわけにも行^ゆかないのである。我々は我々自身ではない。実はやはり機関車のやうに長い歴史を重ねて来たものである。のみならず無数のピストンや歯車の集まつてゐるものである。しかも我々を走らせる軌道は、機関車にはわかつてゐないやうに我々自身にもわかつてゐない。この軌道も恐らくはトンネルや鉄橋に通じてゐるところであらう。あらゆる解放はこの軌道のために絶対に我々には禁じられてゐる。こういう事實は恐ろしいかも知れない。が、いか

に考へて見ても、事實に相違ないことは確たしかである。

もし機関車さへしつかりしてゐれば、——それさへ機関車の自由にはならない。或機関手を或機関車へ乗らせるのは氣まぐれな神々の意志によるのである。ただ大たいてい抵の機関車は兎とに角かく全然さびはてるまで走ることを断念しない。あらゆる機関車の外見上の莊嚴はそこにかがやいてゐるであらう。丁ちやうど度油を塗つた鉄のやうに。……

我々はいづれも機関車である。我々の仕事は空の中に煙や火花を投げあげる外ほかはない。土手の下を歩いてゐる人々もこの煙や火花により、機関車の走つてゐるのを知るであらう。或はとうに走つて行つてしまつた機関車のあるのを知るであらう。煙や火花は

電氣機関車にすれば、ただその響きに置き換へても善い。一人は皆無、仕事は全部」といふフロオベエルの言葉はこのためにわたしを動かすのである。宗教家、芸術家、社会運動家、——あらゆる機関車は彼等の軌道により、必然にどこかへ突進しなければならぬ。もつと早く、——その外ほかに彼らのすることはない。

我々の機関車を見る度におのづから我々自身を感ずるのは必ずしもわたしに限つたことではない。齋藤緑雨は箱根はこねの山を越える機関車の「ナンダ、コンナ山、ナンダ、コンナ山」と叫ぶことを記してゐる。しかし碓氷峠うすひとうげを下る機関車は更に歓びに満ちてゐるのであらう。彼はいつも軽快に「タカポコ高崎たかさきタカポコ高崎」と歌つてゐるのである。前者を悲劇的機関車とすれば後者は

喜劇的機関車かも知れない。

(昭和二年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月27日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

機関車を見ながら

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>